

# 子どもたちを見守り育む環境づくりの推進

## 安八町教育委員会生涯学習課

### 1. はじめに ～地域で子どもを育てるための公民館の役割～

公民館・社会教育施設は、地域住民のニーズを把握し、主導的に学習機会を企画し、自ら提供することができる地域の学習拠点です。特に、子どもたちにとっては、学習がより豊かなものになり、地域独自の課題や公共の課題に対応するなど、普段は提供されにくい分野の学習を支援できる機能があります。

### 2. 公民館活動を通しての地域教育力の向上への取り組み

～伝統を活かしたサークル活動と、新しい課題に挑戦する教室の開催～

#### (1) 安八町ジュニア文化サークル

平成3年度に地元にある太鼓団体の協力をのもと、子ども教室として「子供和太鼓サークル」を開設し、子どもたちが伝統や文化と触れ合うことを目的としてスタート。その後「児童合唱団」「子ども人形劇団」と数を増やしたことで、「安八町ジュニア文化サークル」と命名し活動を続けてきた。平成14年4月に、完全週5日制になってからは、子どもたちの土曜日の居場所となるべく、その道に精通した地域の人々の協力を得て、サークル数を10サークルに増やし、4月(年によっては5月)の合同開講式に始まり、2月の合同修了式&発表会での成果発表を目指して年間の活動している。

文科省が求めている、地域学校協働活動(土曜日の教育支援推進活動)のひとつとして位置付けているこの活動は、2019年度も下記のとおり12サークルを開講し、191人の参加者で開講している。これは、町内の小中学生の13%、小学生に限っては約2割の児童が参加していることになる。

◇サークル別受講者数 (人)

サークル名	受講者
子ども絵画Ⅰ	10
子ども絵画Ⅱ	10
子どもクレイ	26
子ども将棋・囲碁	21
子ども茶道	15
子ども彫り絵	19
子ども天文アカデミー	20
キッズ・イングリッシュ	15
子ども書道	14
子ども華道	15
子ども水郷太鼓	11
子どもパソコン	15
合計	191

◇小学校別学年別受講者 (人)

	名森	牧	結	計
1年生	24	4	8	36
2年生	21	1	14	36
3年生	18	1	14	33
4年生	23	0	11	34
5年生	19	4	7	30
6年生	12	1	4	17
計	117	11	58	186

◇中学校別学年別受講者数 (人)

	登龍	東安	計
1年生	2	1	3
2年生	1	1	2
3年生	0	0	0
計	3	2	5



ジュニア文化サークル参加人数の推移



## (2) 夏休み親子教室・短期教室

子どもたちのやりたいこと、また体験させてあげたいことを、地域の人材を発掘することも踏まえて企画し、講座を開催している。

### ○夏休み親子教室（小学生対象）

子どもたちの夏の思い出つくりと、親子で一緒に物を作ることの楽しさを体験し、親子のふれあいを目的とする。また、親子で参加することで、低学年では少々難しい内容のものにも挑戦できることが利点としてあげられる。

### ○短期教室

地域の企業や専門家を招いて、学校では学習できない体験をさせることを目的とする。

### ◇おもしろサイエンス

【テーマ】瑞浪市のサイエンスワールドに体験学習に出かけた  
り、地元企業の協力により、化学実験を行い、化学の  
面白さや不思議さを体験する。

【対象】小学4年生～6年生

### ◇実験でわかる！自然災害

【テーマ】実験をとおして、風水害や地震の起こる仕組みを  
学ぶ。

【対象】小学1年生～6年生

### ◇めざせ！建築士

【テーマ】1級建築士から、設計の仕方や図面の書き方、実際  
に模型を作ることから、設計士の仕事について学ぶ

【対象】小学5・6年生

### ◇琴をひいてみよう

【テーマ】琴を弾くことで、日本の伝統芸能に親しむ。

【対象】小学1年～中学3年生

### 2019年度親子講座

- ・親子パン作り
- ・親子アイシングクッキー
- ・親子ガラス細工
- ・親子デコパージュ
- ・親子陶芸
- ・親子コースター作り
- ・親子アロマ
- ・親子エコクラフト
- ・親子切り絵
- ・親子ハーバリウム
- ・親子似顔絵作成
- ・親子消しゴムハンコ



おもしろサイエンス



琴をひいてみよう

## 3. まとめ

子どもたちが心豊かに育つためには、学校での学びはもちろんのこと、地域を支える産業や、ふるさとの史跡、伝統文化など、有形・無形の豊かな資源を観たり、体験したり、それらを支える多くの人々の姿に触れたり、話に聞き入ったりするという、多様な価値との出会いが大切である。

こうした学習の場を確保・提供し、子どもたちの多様な体験や経験の機会を増やしていくことを、本町が進める「地域学校協働推進活動」として、大きな成果へとつなげていきたいと考える。